

目次／川口月嶺筆「花籠図屏風」表紙／いわて自然ノート「世界の早池峰山が危うい」 p.2-3／展覧会案内「盛岡藩絵師 川口月嶺のまなざし」 p.4-5／事業報告「伝統芸能鑑賞会 一戸の山伏神楽～高屋敷神楽公演」「こども☆ひかりキラキラ復興フェスティバル」 p.6／事業報告「第65回自然観察会 津波に耐えた砂浜の植物」「第65回地質観察会を終えて」 p.7／インフォメーション p.8

テーマ展 盛岡藩絵師 川口月嶺のまなざし

2013年10月1日(火)～11月10日(日)



花籠図屏風 (花巻市博物館蔵)



花籠図屏風下絵 (岩手県立博物館蔵)

川口月嶺が描いた花籠^{はなかご}図。下絵は岩手県立博物館に、完成した屏風は花巻市博物館に所蔵されています。二つをくらべてみると、構図は同じですが、いくつか変更された点があることに気づきます。上の花籠は色を白くしたことで軽やかな印象となり、花々の色彩が際立ちました。下の花籠の形と花の配置も少し変えて上下のバランスをとり、余白に金箔を散らして華やかに仕上げられています。

飲み込まれた食物は、一度第1胃に入り、微生物により発酵してから逆流して口に戻り、再度かみ砕かれます。本来セルロースを分解できないホニユウ類が、消化器官内に微生物を飼うことによってその分解を可能にした『反芻』という消化システムを獲得しています。これは古第三紀から新第三紀の乾燥化に伴う草原の拡大と同調しているといわれています (Van Soest 1982)。

従って、日本の森林に豊富に生育し、多くの林床を覆う常緑のササはもちろん、稲までも消化でき、多少の例外はあるものの毒草とトゲのある植物以外は何でもいいのです。樹木の皮はぎも大好きなようで、餌がない場合には枯れ葉まで食べてしまいます。おまけに、SFTSウィルスの宿主といわれるフタトゲチマダニ *Haemaphysalis longicornis* を身体中に付着させ、これまで岩手県内では分布情報がほとんどなかったヤマビル *Haemadipsa zeylanica japonica* までを媒介するから厄介です。黙って放っておくと、森林が消え、山が裸地化し、ひいては土砂崩壊を誘発し、そのしつぺ返しは私たち人間社会に波及します。早池峰山の植物など、あっという間に食い尽くされることでしょう。



雄シカの集団(五葉山にて)

■受難の動物・シカ

しかし客観的にみると、シカも大変で可愛そうな動物です。古記録を紐解くと江戸から明治にかけて、大量に捕り尽く

されました。盛岡藩家老席執務日誌でもある「雑書」には、明暦二年(1656年)正月十日(現在の2月5日)に、1日で1,701頭も捕獲され、さらに久保田藩(佐竹家)からは安永元年(1772年)、男鹿半島一帯で27,100頭を捕獲したことも伝えられています。想像を絶する捕獲数ですが、当時はシカを敵軍とみなした軍事訓練の一環の意味あいもあったようです。

東北地方から異常に減少した大正～昭和40年代までは、「北限のシカ」という名目で岩手県五葉山一帯に生息するシカを禁猟による完全保護の名の下、手厚く保護しました。それがため、個体数が生息域の許容量をはるかにこえ農林業に被害を及ぼすようになったら、今度は邪魔者扱いされているのです。その間、シカの大敵であるニホンオオカミ *Canis lupus hodophilax* は、人間により滅ぼされ天敵不在という事態を招いています。

■21世紀のシカ対策と東日本大震災

シカの歴史は、常に人間活動との関係の歴史であり、人間に翻弄され続け、現在に至っています。しかし前述した貴重な自然が、みすみす崩壊することを見逃ごすわけにもいきません。換言するならば、天敵不在を誘導した私たち人間が、天敵になりかわり、適正なシカの個体数に調整する義務を負っているわけです。

まびいたシカは、いただいた命ゆえ資源として有効に活用すべきです。シカ肉は低カロリー・高タンパク・低脂肪・鉄分豊富でヘルシイであり、現代人のダイエット食品として有用する一方、来るべき食糧難時代に備えるのです。さらに、皮は現在の高度な加工技術を駆使しながらなめし、角は民芸品や薬として利活用します。このように考えると、捨てる部

位など皆無で、明るい展望がありました。

しかし、2011年の福島第一原発水素爆発事故による放射能汚染が、福島のみならず他地域にも悪影響を与え、この流れを変えつつあります。被爆したシカ肉の処理が困難な上、銃を津波で流されたハンターたちは、シカを捕獲しなくなったのです。そこで岩手県は、シカ食害による農林産物被害の深刻化に歯止めをかけるべく、「報奨金」による個体数調整に乗り出しました。しかし、捕獲後の適正処理が徹底されるのか、試行段階です。

放射性セシウムが大型獣類にどの程度のスパンでどの程度、濃縮されるのか? 皆目、検討がつきません。世界では、チェルノブイリでの前例があるだけで、そのデータですら、北上山地にそのままあてはまるのか? 不明です。今や日本人は、このような新たな問題に直面し、未来永劫、放射能からの汚染対策・処理を背負うこととなりました。

■おわりに

このように考えると、シカ問題は単なる環境問題ではなく、社会問題であると同時に、国家をあげて取り組むべき重要課題でもあります。そして、この問題はシカに限らず、ニホンツキノワグマ *Ursus thibetanus*・ニホンザル *Macaca fuscata*・イノシシ *Sus scrofa* のほか、近い将来、生息域を拡大しつつある外来種のハクビシン *Paguma larvata*・アライグマ *Procyon lotor* などの対策にも備えなければならぬことを示唆しています。

筆者らは、前述した獣類対策のため、岩手・秋田両県のある農家に依頼して、『追い払い』の実験を試行中です。実験段階とはいえ、年々、効果が現れつつあり、これを今後、本格導入できないか? 模索・検討中です。

■テーマ展

盛岡藩絵師 かわぐちげつれい 川口月嶺のまなざし

会期：平成25年10月1日(火)～11月10日(日) 会場：特別展示室

川口月嶺(1811～1871)は、江戸時代後期の盛岡藩を代表する絵師です。現在の秋田県鹿角市花輪に生まれ、江戸で修行した後、藩に召し抱えられて盛岡城大奥の障壁画制作などに腕をふるいました。

岩手県立博物館では、月嶺の写生帳や画稿類を数多く所蔵しています。今回の展覧会では、これまで展示する機会があまりなかった館蔵資料と併せて他館所蔵の関連作品や盛岡藩の記録類を紹介し、月嶺の修行と仕事、作品制作の舞台裏にせまります。

I 絵師の眼と手

画を写す／自然を写す

絵師の修行は「写す」こと。先生のお手本、尊敬する先人の作品、中国から伝来した絵画など、「画を写す」ことが修行の基本です。構図や筆の勢い、色づかいなど、「画を写す」ことで学ぶことはたくさんあります。そしてもう一つ、大切な修行は「自然を写す」こと。山の形、水の流れ、動物の姿態、虫や花の構造、季節の移り変わりまで、自分の眼で観察して手で紙に写し取ること。画を写し、自然を写すことが絵師として仕事をする上での基礎となるのです。



葵 天保11年(1840)4月23日写生
岩手県立博物館蔵



上 花鳥図屏風
盛岡市先人記念館蔵
左 花鳥図屏風下絵
岩手県立博物館蔵
下 生写集
岩手県立博物館蔵



II 絵師の心得

写す／たくわえる／活かす

絵の注文が来たら、絵師はどうするでしょうか? たいてい「花と鳥の屏風」とか「鶴の掛軸」というふうに指定がありますから、注文主の意向や好みを聞いて制作します。その時役に立つのが「写す」ことによってたくわえた色々な画の模写や四季折々の風物の写生、「写す」ことでつちかった絵を描く技術です。図柄を考える際にはお手本や古画を写したものが参考になりますし、風景や動植物を描く際には写生帳が活躍します。

画や自然を「写す」、それを「たくわえる」、そして作品づくりに「活かす」ことが、絵師の心得といえるでしょう。

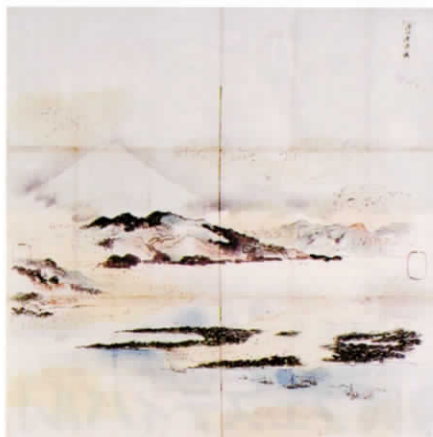
III 殿さまに仕える

南部利済の時代

絵の道を志し、18歳頃に家出同然で故郷を後にしたと伝えられる月嶺。花輪に戻ったのは弘化2年(1845)、数え年35歳の時でした。月嶺の評判はすぐに広まったらしく、翌年2月に盛岡藩に召し出されます。時の藩主は南部利済とじただ(1797～1855)。奥詰を拜命した月嶺は、絵の

御用の際には盛岡城大奥への出入りを許され、襖や屏風、衝立、掛軸など、様々な御用をつとめていきます。大奥の増改築が終了した嘉永4年(1851)12月には、日ごろ絵の御用に励み、大奥普請に尽力した功績によって二人扶持から五人扶持に加増されました。

盛岡城に納められたはずの障壁画の多くは散逸してしまいましたが、月嶺の画稿類の中には、当時の御殿の様子を彷彿とさせる下絵がいくつもあります。

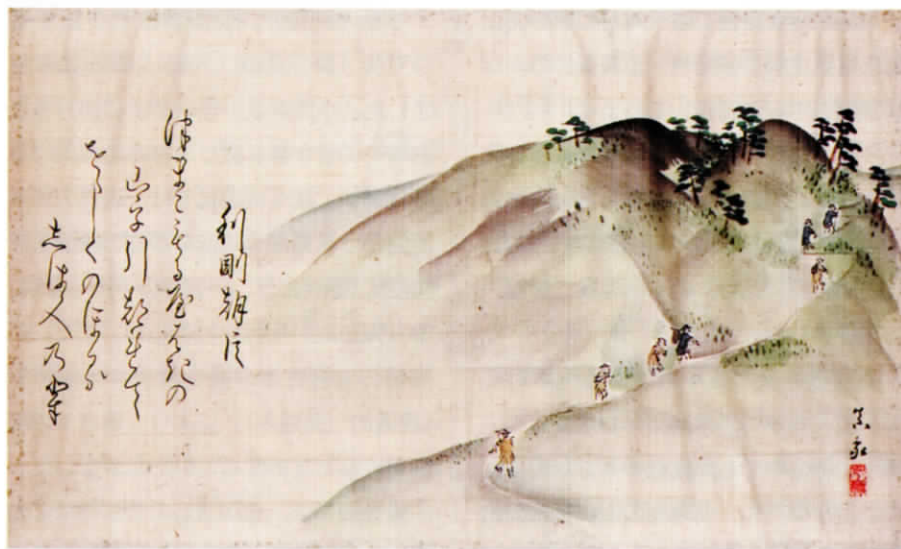


富士山図 (御八疊御襖下絵)
岩手県立博物館蔵

南部利剛の時代

利済が死去した後、月嶺は奥詰の任を解かれ、数年の間、その名がほとんど藩の記録にみられなくなります。しかし、文久3年(1863)に大奥御用間格を拝命、慶応元年(1865)には藩主・南部利剛(1826～1896)の参勤の供をして江戸に上ったことが家老席日誌『覚書』(もりおか歴史文化館蔵)に記されています。月嶺は江戸から京都・大坂方面に向かい、寺社や風景などの写生を数多く残しています。

慶応3年(1867)3月には鉛温泉に湯治に行く利剛に随行。月嶺の別号「真象」は利剛が与えたものと伝えられ、利剛も月嶺の才能を評価していたことがわかります。



大沢八景 慶応3年(1867) 株式会社大沢温泉蔵
南部利剛と随行者が大沢温泉の八景を歌に詠み、月嶺に絵を描かせて画帖としたもの。
写真は八景の内、「矢矧山樵夫」。利剛の歌と月嶺の絵。

IV 絵心と詩心

絵を描く／歌を詠む

月嶺の作品の中には、「盛岡八景」や「大沢八景」など詩歌に詠まれた景色を描いたもののほか、友人や知人の詩歌に絵を添えたものがあります。時には同郷の奈良養斎(東岐 1803～72)らと俳諧を楽しむこともあったようです。

絵と詩歌はともに情景や心象を「うつ

す」もの。「写す」あるいは「映す」ためには、よく見ることや心を研ぎ澄ませることが必要です。風景や動植物、人々の営みに向けられた月嶺のまなざし。時には対象を見極める透徹したまなざし、時には対象を慈しむあたたかなまなざし。

月嶺のまなざしを通して写し出された絵画の世界に目を向けてみませんか。

(歴史部門 主任専門学芸員 齋藤里香)



高砂図(部分) 岩手県立博物館蔵

展示解説会

10月14日(月・祝)、11月9日(土)
両日とも14:30～15:30 要入館料

県博日曜講座

「盛岡藩絵師 川口月嶺のまなざし」
10月27日(日) 13:30～15:00
講師 齋藤里香(展覧会担当学芸員)
当日受付、聴講無料

文化講演会

「南部利済の功罪」
11月3日(日・祝) 13:30～15:00
講師 兼平賢治氏
(東北大学大学院文学研究科助教)
当日受付、聴講無料
※11/3文化の日は入館無料

■事業報告

伝統芸能鑑賞会 「一戸の山伏神楽～高屋敷神楽公演」

平成25年6月2日(日) 午後1時30分～ 3時30分 於 旧佐々木家住宅(曲り家)

伝統芸能鑑賞会では、新たに県の文化財に指定された芸能や、公演機会の少ない芸能を中心に紹介しています。

今年度は、一戸町の高屋敷神楽保存会の皆さまをお招きし、保存会長・大木勇司さんの解説をまじえ、「権現舞」「鶏舞」「鐘巻御寺」「花舞」の4演目をご披露いただきました。

高屋敷神楽の伝承地である一戸町では、現在も多く神楽団体が活動しています。その中でも高屋敷神楽はたくさんの演目を保持し、北東北の山伏神楽の古態を今日に伝えていることから、平成24年11月に同町・中山神楽とともに「一戸の山伏神楽」として県の無形民俗文化財に指定されています。

午後1時30分。公演は権現さまを奉じての「舞い込み(入場)」から始まりました。小気味よい権現さまの歯打ちとお囃子の音が響き渡り、神楽の幕開けを告げます。続く権現舞では、現代の民家で見かけなくなった昔ながらの設備を最大限に活用し、珍しい芸態の「乗り権現」や「火防踊」が行われました。また、ご来場のお客さまの頭を権現さまが噛む「身固め(頭噛み)」により、皆さまの無病息災などを祈念していただきました。

鐘巻御寺は、安珍清姫の悲哀物語に由来する演目です。普段あまり演じることのない演目ですが、今回の公演のために仕事の合間をぬって練習を重ね本番に臨んでいただきました。

公演は、会場となった旧佐々木家住宅

の定員を大きく上回る110名のお客さまが来場し、最後まで高屋敷神楽の演舞を盛りたてていただきました。

【お知らせ】東北文化財映像研究所の阿部武司様より公演の記録映像(101分)をご寄贈いただきました。現在、博物館2階のビデオライブラリ(要入館料)で視聴できます。

(専門学芸員 川向富貴子)



囲炉裏を活用した乗り権現の場面

■事業報告

第64回企画展関連事業 「こども☆ひかりキラキラ復興フェスティバル」

平成25年6月29日(土)・6月30日(日)

梅雨空の中、雨も降らずに両日共に実施することができました。29日には2005名、30日には3056名の方にお出で頂き大盛況のうちに終わることができました。

全国や地元のミュージアムなどから11のコーナーを出展していただきました。屋外では、TAGさんと光る絵を描こう! や小岩井まきば天文館の光を集めてレンズで遊ぼう、アクアマリンふくしまの移動水族館の発光魚エゾイソイナメのタッチ体験や兵庫県立人と自然の博物館移動博物館にはキラキラな虫さんたちを連れてきてもらいました。その他のコーナーも沢山の子もたちで溢れていました。屋内では、グランドホールでキッズプラザ大阪のきらりん☆てんでてで絵をかこう! でホテルの絵や日本科学未



来館のサイボーグ、船の科学館の船のペーパーモデル作りに長蛇の列ができていました。体験学習室でも九州国立博物館のアジアの文化たいけんや伊丹市昆虫館のホタルバッジ作りも講師の方々に休みもないくらいの状態でした。

子どもたちからは、「楽しい」「おもしろい」「またあるの」の声をもらいました。さまざまな体験学習を通して、光をはじ

めとする現象のおもしろさに気づいてもらえたのではないのでしょうか。また、博物館をより身近に感じてもらうことができたと思います。



最後に、岩手県内外のフェスティバルにご協力をいただいた方々に、心から感謝申し上げます。

(主任専門学芸員 藤井千春)

■事業報告

第65回自然観察会 「津波に耐えた砂浜の植物」

平成25年6月16日(日)

博物館からマイクロバスに乗り、20余名で久慈へ出発。道中は雲に覆われていましたが、海岸へ到着すると、次第に青空が見えてきました。現地集合の方との合流地点は、野田層群と呼ばれる地層の観察地として有名なところです。

そこでまずは、三陸ジオパーク研究員の田高正博先生から、目の前にそびえる「半崎の露頭」について、また北三陸地域の砂浜の成り立ちについて、写真や図を使って説明していただきました。

そしていよいよ砂浜へ。夏井川の河口には長さ約500mの砂州があります。東北地方太平洋沖地震と津波の影響で、岩手県沿岸各地の砂浜は面積が大きく減少しましたが、ここ夏井には大きな砂浜が残り、一時は減った砂浜特有の植物も復



活して、いっそう貴重な場所となりました。講師の島田直明先生(岩手県立大)から、御自身の調査結果に基づく解説を伺いつつ、深い砂に足を踏み入れます。

砂浜ではハマナスやハマエンドウなどの花が満開で、甘い香りが風に漂っていました。ここでは、植物にとって砂浜という環境がいかに厳しいものかについて、教えていただきました。

砂浜での観察を終え、車で北侍浜のキ



ャンプ場へ移動し、短い昼食休憩の後、岩場へ下りました。ここではゼンテイカやエゾネギ、ハマハイビャクシンなど、砂浜とはひとあじ違う磯の植物を観察し、岩場を造っている花崗岩についての解説もうかがいました。

海岸の植物と、その生育環境を支える大地の成り立ちについて、深く学ぶことができた1日でした。

(専門学芸員 鈴木まほろ)

■事業報告

第65回地質観察会を終えて

山口鉦山跡を訪ねて 平成25年7月7日(日)

国道106号沿いに流れる閉伊川は、朝方の雨で黒褐色に濁り水高を増していました。山口鉦山跡は宮古市田代地区にあり、田代川支流の亀ヶ沢川を渡ったところにあります。この亀ヶ沢川には、鉦山跡を所有する皆川幸牛氏により立派な丸太橋がかけられ、心配された雨の影響もなく、参加者全員が無事に川を渡ることができました。

山口鉦山跡がある大鰐谷森は、北側と南側を流れる亀ヶ沢川とその支流に挟ま



(写真1) 亀ヶ沢にかかる丸太橋

れ、東側に舌状にのびています。川底には所々に白亜紀の花崗岩類が露出し、大鰐谷森尾根上にはジュラ紀の海成堆積岩類が点々と分布しています。鉦山跡は、それらが接している部分にあります。

山口鉦山ではいくつかの鉦床を採掘していましたが、本観察会では旭鉦床から捨てられたズリ石を観察しました。ズリ置き場は、川を渡ってすぐのところと、さらに谷の奥に入ったところにあります。参加者は2つのズリ置き場で思い思いに散らばり、ハンマーで岩石を割りながら鉦物を探していました。採集した鉦物は、紫外線で蛍光する灰重石、青みを帯びた銀白色の輝水鉛鉦、濃緑色の角閃石などです。

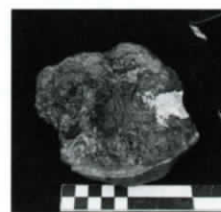
この日は朝から蒸し暑く、しかも足場



(写真2) ズリ山から鉦物を探す参加者

が悪い場所があるため、参加者は大粒の汗を流しながら谷を登り、地球からの贈り物に歓声をあげていました。

最後に、いろいろお世話いただいた山口鉦山跡を所有する皆川幸牛氏や宮古市



教育委員会には心から感謝申し上げます。

(上席専門学芸調査員 吉田充)

(写真3) 蛍光した灰重石(白色部)



岩手県立博物館

IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション〈2013.9.1~2013.12.31〉

展覧会

■テーマ展「盛岡藩絵師 川口月嶺のまなざし」

10月1日(火)～11月10日(日) 特別展示室

江戸時代後期の盛岡藩を代表する絵師川口月嶺の画業を写真帳や画稿類、関連作品、藩の記録などから紹介いたします。

展示解説会

10月14日(月・祝)

11月9日(土)

各14:30～15:30

特別展示室 要入館料

関連事業

文化講演会・日曜講座の欄をごらんください。



川口月嶺「山水真写譜」

■テーマ展「新収蔵資料展 -2008～2012 新コレクション-」

12月7日(土)～平成26年2月23日(日) 特別展示室

平成20～24年度に当館が新たに収集・登録した資料のうち、未公開のものを中心に展示します。

展示解説会

12月15日(日) 14:30～15:30

特別展示室 要入館料



「郷土玩具」

■合同展(移動展)

岩手県文化振興事業団プレゼンツ「文化・芸術が集うときin紫波町」

11月14日(木)～17日(日) 10:00～17:00

会場:紫波町情報交流館 大スタジオ 入場無料

展示解説会:11月16日(土)・17日(日)各14:00～15:00

県民会館、県立美術館、埋蔵文化財センター、県立博物館がコンサートや展覧会を行います。当館は岩手のお宝を展示します。

■巡回展 第64回企画展「いわての光る生きものたち」

8月28日(水)～9月2日(月) 宮古会場: 県立水産科学館

9月7日(土)～8日(日) 久慈会場: もぐらんぴあ・まちなか水族館

※詳しくはお問い合わせください。

■第5回博物館まつり

10月6日(日) 9:30～16:00

芝生広場・民家ほか。

対象 小学生以下。参加無料

まが玉づくり、化石のレプリカづくり、土版づくり、火おこし、昔あそびなどいろいろな体験をしよう。

(保護者が入館する時は入館料が必要です。)



■文化講演会

11月3日(日・祝) 13:30～15:00 講堂 当日受付 聴講無料

「南部利済の功罪」講師: 兼平賢治氏 (東北大学大学院助教)

※テーマ展関連事業

■観察会

◆第66回地質観察会「早池峰山周辺の地質」

9月23日(月・祝) 10:00～15:00 盛岡市根田茂～花巻市大迫町
根田茂帯と南部北上帯最下部の地層・岩石のかかわりについて分かりやすく説明します。

講師: 川村寿郎氏 (宮城教育大学教授)

内野隆之氏 (産業技術総合研究所)

博物館集合・解散(バス移動) 定員20名(小学生高学年以上)

参加費未定(バス代・保険料等負担) ※要事前申込み

■考古学セミナー

◆第1回「安倍氏の本拠地 一鳥海桐を訪ねて」

9月21日(土) 8:30～17:00 金ヶ崎町(現地見学会)

博物館または盛岡駅集合・解散(バス移動) 定員30名

参加費4,000円(バス代・保険料等) ※要事前申込み

■県博日曜講座

第2・第4日曜日 13:30～15:00 当日受付 聴講無料 講堂・教室

当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。

9月22日「早池峰山周辺の地質について」

川村寿郎氏(宮城教育大学教授)

「1/5万地質図幅「早池峰山」について」

内野隆之氏(産業技術総合研究所)

*この回は終了15:40予定

10月13日「清衛の瓦」

鎌田 勉(学芸第三課長)

10月27日「盛岡藩絵師 川口月嶺のまなざし」(※テーマ展関連)

齋藤里香(学芸員)

11月10日「日本の絵画・文書の損傷と修復」

増田勝彦(昭和女子大学教授)

11月24日「唐三彩に見る東西文化伝播について」

笠原雅史(学芸員)

12月8日「縄文時代の「孔」について」

八木勝枝(学芸員)

12月22日「はじめての南部絵巻～南部絵巻を読み解く・入門編～」

瀬川 修(学芸員)

■週末の催し

◆ミュージアムシアター

毎月第1土曜日 13:30～15:10 講堂 当日受付 視聴無料

童話や昔話、感動の物語を上映します。小中学生～一般対象

9月7日 おやすみ

10月5日 ティズニアニメ名作シリーズ「ダンゴ」ほか

11月2日 ティズニアニメ名作シリーズ「パンビ」ほか

12月7日 日本のおばけ話シリーズ「のつべらぼう」ほか

◆チャレンジ!はくぶつかん

毎月第2・第3土曜、日曜、祝日 小学生向け 随時受付

チャレンジ!マークをさがしてはくぶつかんをたんけん!

9月14日・15日・16日・21日・22日・23日 テーマ: 黒

10月12日・13日・14日・19日・20日 テーマ: 食

11月9日・10日・16日・17日 テーマ: 骨

12月14日・15日・21日・22日・23日 テーマ: 水

◆たいけん教室～みんなでためそう～(予約制)

毎週日曜日 13:00集合～14:30 幼児・小学生20名程度 参加無料

さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみよう。

※要事前申込み。参加を希望する日の1週間前の日曜日から前日の

9:30～16:30まで(休館日を除く) 電話または博物館で先着順に

受け付けます。1度に3名まで予約可能です。詳細はお問い合わせ

ください。

9月	1日	休館日	22日	ばねのキツツキおもちゃ
	8日	休館日	29日	さとうかつひで先生の竹トンボ
	15日	入浴剤づくり		
10月	6日	博物館まつり	20日	スライムであそぼう
	13日	こはくの玉づくり	27日	葉っぱのカラフルカード
11月	3日	かけじくをつくらう	17日	化石のレプリカづくり
	10日	まが玉アクセサリー	24日	石のオリジナルはんこ
12月	1日	松ぼっくりのXmasツリー	15日	まゆで干支(午)づくり
	8日	いさかまき先生のごんげんさまのカスタネット	22日	かんたん門松づくり
			29日	休館日

◆わら・ガマ細工～民家のくらし～

9月22日(日)、10月13日(日)、27日(日) 第2・4日曜日

各10:30～15:00 民家(南部の曲がり屋) 見学・体験無料

わらじ、つまご、円座、えじこ、けらなどのわら・ガマ細工の実演

をしています。ご希望の方には作り方をお教えます。実演は阿部

茂巳(盛岡市)さんです。

■定時解説

平日・土曜 13:30～14:30 日曜 10:30～11:30

解説員が常設展示室をご案内します。そのほかにも随時、解説員がご質問や解説のご希望におこたえしています。

■利用のご案内

■開館時間 9:30～16:30(入館は16:00まで)

■休館日 月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館。)

9月17日・24日、10月15日、11月5日、12月24日

資料整理日(9月1日～10日)

年末年始(12月29日～1月3日)

■入館料 一般300(140)円・学生140(70)円・高校生以下無料

()内は20名以上の団体割引料金

※9月16日(月・敬老の日)は、65歳以上入館料無料

※11月3日(日・文化の日)は入館料無料

※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料

免除となります。

※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの

方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより 第138号 平成25年9月1日発行	編集 岩手県立博物館 〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831 / Fax. (019)665-1214 発行 公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023 盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235 / Fax. (019)625-3595
------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------